

永井荷風「西遊日誌抄」『あめりか物語』補注： フランス詩の引用について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2022-03-23 キーワード: 作成者: 菅原, 克也 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1741

《研究ノート》

永井荷風「西遊日誌抄」『あめりか物語』補注

—フランス詩の引用について—

菅原 克也

はじめに

永井荷風（1879～1959）の滞米滞仏体験から生まれた「西遊日誌抄」『あめりか物語』『ふらんす物語』にはフランス詩の引用が多く含まれている。本稿では、このうち「西遊日誌抄」及び『あめりか物語』にあらわれるフランス詩について、出典その他に関し確認できることを記した。『ふらんす物語』については、許される紙数の関係から別稿に譲り、次号を期す。

荷風は1903（明治36）年9月に渡米し、1908（明治41）年7月に帰国した。この間の滞米滞仏体験にもとづいて発表されたのが「西遊日誌抄」、『あめりか物語』、『ふらんす物語』である。『あめりか物語』は1908（明治41）年8月に博文館から刊行された。『ふらんす物語』は1909（明治42）年3月に博文館から刊行予定のところ、「風俗壊乱」の廉で発禁処分を受けた。ただし、収められた諸篇は、書き下ろしの「放蕩」及び「異郷の恋」以外は、既に諸雑誌に発表済みであった。「西遊日誌抄」は、これらにかなり遅れて1917（大正6）年4月以降『文明』（荷風主筆・靱山書店発行）誌上に連載され、その後全集に収められた。本稿では便宜上「西遊日誌抄」、『あめりか物語』の順に注を記した。

荷風は1913（大正2）年4月に『珊瑚集』を刊行する。この訳詩集に収められたフランス詩については、及川茂氏の綿密な原典研究がある〔及川茂「『珊瑚集』原詩考（『埼玉大学紀要 外国語学文学篇』第13巻、埼玉大学教養部、1979年）〕。及川論文であらためて明かになったのは、荷風のフランス詩受容に果たしたヴァルク（G. Walch）詞華集の重要性である〔ヴァルク詞華集については夙に島田謹二による指摘がある〕。ヴァルク詞華集は初版が1906年に出ており、「西遊日誌抄」中の記述、『あめりか物語』所収のフランス詩の引用を含む諸篇の発表時期に照らして、滞米滞仏時のフランス詩の受容に重要な役割を果たしたと考えられる。本稿では、まずヴァルク詞華集の収載の有無を確認し、これにないものについて、その他の文献を参照した。以下にヴァルク詞華集の書誌を記す。

Anthologie des poètes français contemporains, Le Parnasse et les écoles postérieures au Parnasse (1866-1906), Morceaux choisis, accompagnés de notices bio- et bibliographique et de nombreux autographes par G. Walch, Préface de Sully Prudhomme de l'académie française. Paris : Librairie Delagrave, 1906.

及川論文が指摘する通り、三巻本の該書は版を重ね、それに伴い増補・改訂が行われたよ

うである。たとえば、1927年刊の新版（Nouvelle Edition）は、副題の部分を *Le Parnasse et les écoles postérieures au Parnasse (1866-1925)* としている。

本稿では、まず新版荷風全集（『荷風全集』第4巻、第5巻、岩波書店、1992年）のテキストを本文として引用し、次に引用されるフランス詩の出典、原文、異同、および参考の記事等を記した。

なお、岩波書店から刊行された荷風全集には旧版と新版とがあり、旧版がもっとも遅い時期に成立したテキストを採るのに対し、新版はもっとも早い時期のテキストを採る。本稿では新版荷風全集から本文を引いた。旧版荷風全集および新版荷風全集の書誌は以下の通り。

（旧 版）

「西遊日誌抄」 『荷風全集』第19巻（岩波書店、1964年）

『あめりか物語』 『荷風全集』第3巻（岩波書店、1963年）

（新 版）

「西遊日誌抄」『あめりか物語』 『荷風全集』第4巻（岩波書店、1992年）

『あめりか物語』附録「フランスより」 『荷風全集』第5巻（岩波書店、1992年）

本稿では、引用文中、二字分を占める踊り字は、繰り返す文字の後半を**で示した。ルビはすべて省いた。また、原文に付した日本語の大意は筆者が補った。

1. 「西遊日誌抄」① [第4巻 p. 335]

【本 文】

西暦千九百〇七年 明治四十年

正月一日 千九百〇七年とはなりぬ余は午近く起出ると共に唯茫然また啞然として灰色に曇りたる新年の空を打眺めぬ。抑も余が生涯何ぞかく意外の事のみ多きや。余の米国に來りし事既に意外なり。新大陸の諸處に彷徨し緑蔭深き華盛頓の街頭に囚らず金髪の一女に逢ひ遂に別るべからざる情縁に悩む。実に意外なり。一度父の命により□□〔正金〕銀行の雇人となり算盤を把る事早くも二年未解雇せられず。実に意外なり。余は今正に進まれる千九百〇七年を如何に送り尽すべきか全く予想する事能はず。余は秋風に翻へる落葉の如く運命の導く處に行かんのみ。

Je vais où le vent mène,
Sans me plaindre ou m'effrayer,
Je vais où va toute chose,
Où va la feuille de rose
Et la feuille de laurier.

【出典】

Antoine-Vincent Arnault [アントワーン=ヴァンサン・アルノー (1766–1834)] の *Fables*, Livre V [寓話 第5巻] XVI の «La feuille» [葉]。ヴァルク詞華集にはなし。

【原文】

以下に Gallica が公開する *Œuvres de A. V. Arnault, de l'ancien institut de France, etc., etc.*, Tome 4, *Fables et poésies diverses*, Paris: Bossange père; Bossange frères, 1825, p. 168. からテキストを引く。

La Feuille

— De ta tige détachée,
Pauvre feuille desséchée,
Où vas-tu ? — Je n'en sais rien.
L'orage a frappé le chêne
Qui seul était mon soutien.
De son inconstante haleine,
Le zéphyr ou l'aquilon
Depuis ce jour me promène
De la forêt à la plaine,
De la montagne au vallon.
Je vais où le vent me mène,
Sans me plaindre ou m'effrayer,
Je vais où va toute chose,
Où va la feuille de rose
Et la feuille de laurier.

(大意)

「葉」

— 茎からもぎ取られ、／哀れにもひからびてしまった葉よ、／お前はどこにゆくのだ？
— 私にはわからない。／雷雨が、私の唯一の支えだった／ナラの木に襲いかかった。／その移り気な息で、／西風か北風かが／この日以来私を吹き運ぶ／森から平野へ、／山から谷へと。／私は風が運んでくれるところへ行く、／嘆くことなく、恐れることなく、／私はあらゆるものが行くところへ行く、／バラの葉が行くところ、／そしてオリーブの葉が行くところへ。

【異同】

引用第一行は «Je vais où le vent me mène,» の «me» [私を…] を欠く (誤記・誤植か)。

*旧版荷風全集も «me» を欠くかたちを引き継ぐ。

【参 考】

この詩を荷風がどのような経緯で知るにいたったかについては、なお検討の余地がある。

2. 「西遊日誌抄」② [第4巻 p. 336]

【本 文】

[1907 (明治40) 年]

一月二十日 (日曜日) 午後カアネギイ楽堂に仏人ドビュツシイの作曲演奏せらるゝ由聞きたれば行きぬ。マラルメの詩「牧野白日夢」を題とせし一曲最も深く余の心を感動せしめたり。

【出 典】

Stéphane Mallarmé [ステファヌ・マラルメ (1842-1898)] の *L'Après-midi d'un faune* (Paris: Alphonse Derenne, 1876) [半獣神の午後] に言及したもの。

【参 考】

この詩は、Claude Debussy [クロード・ドビュッシー (1862-1918)] により1892年～1894年に «Prélude à l'Après-midi d'un faune» [牧神の午後の前奏曲] として音楽化された。「Après-midi d'un faune」は通例「半獣神の午後」または「牧神の午後」と訳されるが、荷風がこれを「牧野白日夢」としたのは、詩の内容に適う訳として興味深い。

3. 「西遊日誌抄」③ [第4巻 p. 343]

【本 文】

[1908 (明治41) 年]

三月十一日 雨となり風となり又晴れ渡る此頃の空模様まことにミュツセが「三月半」ミカレームの詩に歌はれたるが如し。

【出 典】

Alfred de Musset [アルフレッド・ド・ミュッセ (1810-1857)] の *Poésies nouvelles de Alfred de Musset : 1836-1852* (Paris: Charpentier, 1852) [アルフレッド・ド・ミュッセの新しい詩—1836～1852年] に収める «À la mi-carême» [四旬節中日に] に言及したもの。この詩の第2節 (全十二節) に以下のようなくだりがある。テキストはプレイヤード版 (Alfred de Musset, *Poésies complètes*, Edition établie et annotée par Maurice Allem, Paris: Gallimard, 1957, pp. 347-8.) に拠る。

Du pauvre mois de mars il ne faut pas médire;
Bien que le laboureur le craigne justement:
L'univers y renaît; il est vrai que le vent,
La pluie et le soleil s'y disputent l'empire.
Qu'y faire ? Au temps des fleurs, le monde est un enfant;
C'est sa première larme et son premier sourire.

(大意)

哀れなこの三月を悪く言ってはなるまい。／耕す人がこの月を恐れるのは当然だが、／世界はここで生まれ変わる。この時まさしく風が、／雨が、そして太陽が互いに領分を争う。／
いったい何ができるだろう？ 花の季節、世界は一人の稚な子。／それは、世界の最初の涙、
最初の微笑み。

【参考】

「西遊日誌抄」でミュッセが初めて言及されるのは1907(明治40)年1月7日の記事で「始めてミュッセが悲しき詩を読む。余は今日まで幾度か英詩に興を得んとして失敗したり然るに一度仏蘭西語もて綴られたる詩を読むや余は茲に始めて韻文の妙味を解し得たるが如き心地せり」とある。その翌日の1月8日の記事にも「あゝ美しきミュッセの詩よ余は銀行内にありても折あれば窃に衣囊より一卷を取出して黙読せり」とある(p. 336)。ちなみに高踏派(parnassien)以降の詩を扱うヴァルク詞華集には、当然のことながらミュッセの詩は収載されていない。

4. 『あめりか物語』題詩 [第4巻 pp. 5-6]

【本文】

(表)

Mais les vrais voyageurs sont ceux-là seuls qui partent
Pour partir; cœurs légers, semblables aux ballons,
De leur fatalité jamais ils ne s'écartent,
Et, sans savoir pourquoi, disent toujours; Allons !

(Le Voyage—Ch. Baudelaire.)

(裏)

唯だ行かんが為めに行かんとするものこそ、真個の旅人なれ。心は気球の如くに軽く、身は悪運の手より逃れ得ず、如何なる故とも知らずして常に唯だ、行かん哉、行かん哉と叫ぶ。
(旅—ボードレール)

【出典】

Charles Baudelaire [シャルル・ボードレール (1821-1867)] の *Les Fleurs du mal* (Pa-

ris: Auguste Poulet-Malassis, 1857) [悪の華] に収める «Le Voyage» [旅] の第1節（全八節）第5連（全六連）。ヴァルク詞華集にはない。

以下に当該部分の阿部良雄訳を引く。

だがしかし、真の旅人とは、出発するために出発する／人々のみ。その心は気球にも似て軽々と、／彼らはついに己れの宿命から離れることなく、／そして、なぜかは知らず、常に言う、「ゆこう！」と。[阿部良雄訳『ボードレル全集 I 悪の華』（筑摩書房、1983年）、pp. 253-4]

5. 「おち葉」 [第4巻 pp. 236-8]

【本文】

ベンチの背に頬杖をついて、自分は何やら耽る物思ひの、ふと心の中にベルレーンが、『秋の歌』と云ふのを思ひ出した。

Les sanglots longs
Des violons
De l'automne
Blessent mon cœur
D'une langueur
Monotone.

Tout suffocant
Et blême, quand
Sonne l'heure,
Je me souviens
Des jours anciens
Et je pleure.

Et je m'en vais
Au vent mauvais
Qui m'emporte
Deçà, delà
Pareil à la
Feuille morte.

『秋の胡弓の咽び泣く、物憂き響き、わが胸を破る。時鳴れば、われ色青く、吐く息重く、

過し昔を思出で、泣く。悪命の風に運ばれて、こゝかしこ、われは落葉の如く彷徨ふ。』と、人の身を落葉に比る例は、新しからぬだけ、いつも身にしむ思ひである。殊に今、旅の身の上を思出れば……あゝ、自分はまだ、何処に、何度、異郷の地に埋るゝ落葉を眺めたであらう。

【出典】

Paul Verlaine [ポール・ヴェルレーヌ (1844–1896)] の *Poèmes saturniens* (Paris: Alphonse Lemerre, 1866) [サチュルニアン詩集] に収める «Chanson d'automne» [秋の歌] の全三節。ヴァルク詞華集に収める (第1巻 pp. 370-371)。

【異同】

ヴァルク詞華集所載のテキストは、荷風引用のものと、各行のインデントを異にする。またヴァルク詞華集では第2連5行目の «Des jours anciens» のあとに «,» (virgule) を付す。以上のことから、荷風はヴァルク詞華集ではなくヴェルレーヌの『詩抄』 (*Choix de Poésies*) 等によったものと思われる。*Choix de Poésies* は Charpentier から 1891 年に刊行されて以降、諸版がある。

【参考】

上田敏の訳が人口に膾炙する詩である。上田敏の『海潮音』は 1905 (明治 38) 年 10 月に刊行されているので、これは読者の多くが既に知るところの詩であったろう。堀口大學訳、金子光晴訳等、この後にも多くの訳が試みられている。大意は省く。「ヴィオロン」「ヴァイオリン」等と訳されることの多い «violon» を、荷風が「胡弓」としたのが注目される。

6. 「支那街の記」① [第4巻 pp. 248-9]

【本文】

あゝ！ 毒烟の天国——ある仏蘭西の詩人は PARADIS ARTIFICIELS (人工の楽土) と云つた——この夢幻の郷に遊ぶまでには、人は世の常ならぬ絶望、苦痛、墮落の長途を経なければならぬ、が、一度、此処に至れば、全く煩悶、未練の俗縁を脱して了ふ事が出来るのであらう。見よ、彼等の眠りながらに覚たる眼の色を！ 私は恐る**打目成る度毎に、自分は僅ばかり残つて居る良心に引止められて、何故一思にこゝまで身を落す事が出来ないのかと、勇氣と決心の乏しいのに、云はれぬ憤怒を感ずるのである。

【出典】

ボードレールの *Les Paradis artificiels, Opium et haschisch*. (Paris: Poulet-Malassis et de Broise, 1860) 「人工天国 阿片とハシッシュ」に言及したもの。「この夢幻の郷に遊ぶまでには、人は世の常ならぬ絶望、苦痛、墮落の長途を経なければならぬ、が、一度、此処に至れば、全く煩悶、未練の俗縁を脱して了ふ事が出来るのであらう。見よ、彼等の眠りながらに覚たる眼の色を！」は引用のようにも読めるが、ボードレールの「人工天国」にはこれに対

応ずる表現は見あたらないようである。なお後考を俟つ。

7. 「支那街の記」② [第4巻 p. 250]

【本文】

思出すのは、ボードレールが、Ruines! ma famille! ô cerveaux congénères! (荒廃わが家族! 同種の脳髓!) と叫んでユーゴーに贈つた LES PETITES VIEILLES (小老婆) の一篇である。

【出典】

ボードレールの『悪の華』に収める «Les Petites vieilles» [小さな老婆たち] (A Victor [ヴィクトール・ユーゴーに] の献辞がある) の第4節 (IV) 第6連 (最終節最終連) 第1行。ヴァルク詞華集に収める (第1巻 pp. 141-143)。参考までに「IV」の第6連をヴァルク詞華集から引用する。

Ruines ! ma famille ! ô cerveaux congénères !
Je vous fais chaque soir un solennel adieu !
Où serez-vous demain, Eves octogénaires,
Sur qui pèse la griffe effroyable de Dieu !

以下に阿部良雄訳を引く。

生ける骸よ! わが同族よ! 同じ種属の脳髓たちよ! / 毎晩、御身らに、莊重な別れの言葉を贈るこの私! / 明日、御身らはどこに在るだろうか、八十歳のエヴァたち、/ 神の怖るべき鉤爪に、抑えつけられる人々よ? [阿部良雄訳『ボードレール全集 I 悪の華』(筑摩書房、1983年)、p. 178]

8. 「夜あるき」 [第4巻 pp. 254-5]

【本文】

あゝ、されば、この光を得、この光に照されたる世界は魔の世界に候。醜行の婦女もこの光によりて貞操の妻、徳行の処女よりも美しく見え、盗賊の面も救世主の如く悲壮に、放蕩児の姿も王侯の如くに気高く相成り候。神の栄え、靈魂の不滅を歌ひ得ざる墮落の詩人は、この光によりて初めて、罪と暗黒の美を見出し候。ボードレールが一句、

Voici le soir charmant, ami du criminel
Il vient comme un complice, à pas de loup, le ciel
Se ferme lentement comme une grande alcôve,
Et l'homme impatient se change en bête fauve.

『罪の友なる懐しき夜は、悪事の共謀人の如く、狼の歩み静に進み来りぬ。いと広き寝屋の如に、空徐に閉さるれば、心煩める人も愚なる獣の如くにぞなる……』と。余は昨夜も例の如く、街に灯の見ゆるや否や、直に家を出で、人多く集り、音楽湧出るあたりに晚餐を準備へて後、とある劇場に入り候。劇を見る為めには非ず、金色に彩りたる高き円天井、広き舞台、四方の棧敷に輝き渡る燈火の光、酔はんが為めなれば、余は舞姫多く出で、喧しく流行歌など歌ふ、趣味低きミュージカル、コメデーを選び申候。

【出典】

ボードレールの『悪の華』に収める «Le Crépuscule du soir» の冒頭第1連（全四連）全4行。ヴァルク詞華集にはなし。

【原文】

以下にプレイヤー版 (Baudelaire, *Œuvres complètes*, Texte établi et annoté par Y. -G. Le Dantec, Edition Révisée complétée et présentée par Claude Pichois, Paris: Gallimard, 1961, p. 90) のテキストの当該部分と、阿部良雄訳を引く。

Voici le soir charmant, ami du criminel;
Il vient comme un complice, à pas de loup; le ciel
Se ferme lentement comme une grande alcôve,
Et l'homme impatient se change en bête fauve.

犯罪者の友である、愛想のいい夕暮れがやってきた。／共犯者のように、ぬき足さし足しのび寄る。空は／ゆったり広い寝室のように、しずしずと閉ざされ、／いら立ちながら待っていた人間は、森の獣と化する。[阿部良雄訳『ボードレール全集 I 悪の華』(筑摩書房、1983年)、p. 183]

【異同】

プレイヤー版のテキストとの異同は以下の通り。

- (1) 第1行末尾の «;» (point-virgule) なし。
- (2) 第2行後半 «à pas de loup» のあとの «;» (point-virgule) を «,» (virgule) に作る。

9. 「六月の夜の夢」 [第4巻 pp. 278-280]

【本文】

自分は遂にフランスに着したのだ。

あゝ、然し、この止みがたき心の痛みを如何にせん。自分は思ひ出るともなく、ミュツセがモザルトの音楽に寄せて歌つた一詩――

Rappelle-toi, lorsque les destinées
M'auront de toi pour jamais séparé,

.....
.....

Songe à mon triste amour, songe à
L'adieu suprême !

.....

Tant que mon cœur battra,
Toujours il te dira:
Rappelle-toi.

思ひ出よ。もし運命の永遠に、我を君より別ちなば、我が悲しき恋を思ひ出よ。別れし折を思ひ出よ。我が心の響く中は、我が心君に語らん、『思ひ出よ』と。

心の中に口ずさみつゝ、初めて見るフランスの山に、自分は敬意を表する為めにと、一足一足、甲板の方に歩いて行つた。

Rappelle-toi, quand sous la froide terre
Mon cœur brisé pour toujours dormira;
Rappelle-toi, quand la fleur solitaire
Sur mon tombeau doucement s'ouvrira.
Tu ne me verra plus; mais mon âme immortelle
Reviendra près de toi comme une sœur fidèle.

Ecoute dans la nuit,
Une voix qui gémit:
Rappelle-toi.

思ひ出よ。冷き地の下に永遠に、わが破れし心眠りなば、思ひ出でよ。淋しき花の徐に、わが墓の上に開きなば、君は再びわれを見じ。されど死なざるわが魂は、親しき妹が如くに、君が傍に返り来ん。心澄して夜に聞け。さゝやく声あり、『思ひ出よ』と。

あゝ。あゝ。

Rappelle-toi—Rappelle-toi—

【出典及び書誌】

Alfred de Musset の *Poésies nouvelles de Alfred de Musset: 1836-1852* に収める «Rappelle-toi» [思い出しておくれ (覚えていておくれ)] の第2連 (全三連) 以降。この詩の表題の下に (Vergiss mein nicht) [(ワスレナグサ)] とあり、さらに «Paroles faites sur la musique de Mozart» [(モーツァルトの音楽に宛てた歌詞)] と記されている。

【原文】

プレイヤー版 (*Poésies complètes*, pp. 419-420) のテキストの第2連以降、及び大意は以下の通り。

Rappelle-toi, lorsque les destinées
M'auront de toi pour jamais séparé,
Quand le chagrin, l'exil et les années
Auront flétri ce cœur désespéré;
Songe à mon triste amour, songe à l'adieu suprême !
L'absence ni le temps ne sont rien quand on aime.
Tant que mon cœur battra,
Toujours il te dira
Rappelle-toi.

Rappelle-toi, quand sous la froide terre
Mon cœur brisé pour toujours dormira;
Rappelle-toi, quand la fleur solitaire
Sur mon tombeau doucement s'ouvrira.
Je ne te verrai plus; mais mon âme immortelle
Reviendra près de toi comme une sœur fidèle.
Ecoute, dans la nuit,
Une voix qui gémit:
Rappelle-toi.

覚えていておくれ。運命が私をあなたから／永遠に引き離してしまおうとする時／懊悩、追放、年月が／この絶望した心を萎れさせてしまおうとする時、／私の悲しい愛を思っておくれ、最後の別れの言葉を思っておくれ！／不在も時間も愛してこそいれば何ものでもない。／私の心臓が脈打つあいだは／私の心（臓）はあなたに言うだろう／覚えていておくれ、と。／覚えていておくれ。冷えた地面の下に／私の壊れた心（臓）が永遠に眠ろうとする時／覚えていておくれ、一つだけ咲く花が／私の墓の上にひっそりと花開こうとする時。／私はもうあなたに会うことはない。だが私の滅びることのない魂が／まめやかな妹のようにあなたの傍らに戻ってくるだろう。／ほら、夜のなかに／声が嘆いている／覚えていておくれ——と。

【異同】

- (1) 第2連第1～2行のインデントなし。
- (2) 第2連第5行の「l'adieu suprême!」以下を次行に送り、独立行とし、インデントする。

*旧版荷風全集では「l'adieu suprême!」が次行に送られることはなくなる。

(3) 第2連第7～9行のインデントが異なる。

(4) 第2連第8行の末尾に«:» (deux-points) を付す。

(5) 第3連全体のインデントが異なる。

*旧版全集ではインデントはほぼプレイヤー版のテキストのかたちをとる。

(4) 第3連第5行の«Je ne te verrai plus;» を«Tu ne me verra plus;» に作る。ただし«verra»は二人称単数の活用形としては«verras»が正しい(誤記・誤植)。

*旧版荷風全集もこの誤記・誤植を引き継ぐ。

(5) 第3連第7行の«Ecoute»のあとに«,» (virgule) なし。

【参 考】

荷風の引用による第3連第5行は«Je ne te verrai plus;» [私はもうあなたに会うことはない] を«Tu ne me verra(s) plus;» [あなたはもう私に会うことはない] に作るが、プレイヤー版の校異を見るかぎり、そのようなテキストは存在しないようである。第2連第5行の«l'adieu suprême!»を独立行とすることも、詩行として本来ありえない。荷風は記憶で引いたのだろうか。

ちなみに、荷風にとってフランスは眷恋の地であったはずである。この詩にあらわれる別れの感情は「西遊日誌抄」にあらわれる「妓イデス」についてのものと解釈できる。

10. 「船と車」 [第5巻 pp. 13-4]

【本 文】

(…) 家路に急ぐ男や女や、または家畜の影は、黄昏の光の薄れ行くに従つて、却て明かに、遠い遠い地平線のはづれに動く……あゝ此の明い、静な、フランスの野の夕暮と云へば、自然とかの田園画家ジュール、ブルトンの一詩が、思返されるのである。

Voici l'ombre qui tombe, et l'ardente fournaise
S'éteint tout doucement dans les flots de la nuit,
Au rideau sourd du bois attachant une braise
Comme un suprême adieu. Tout se voile et s'apaise,
Tout devient idéal, forme, couleur et bruit,
Et la lumière avare aux détails se refuse;
Le dessin s'ennoblit, et dans le brun puissant,
Majestueusement le grand accent s'accuse;
La teinte est plus suave en sa gamme diffuse,
Et la sourdine rend le son plus ravissant.

Miracle d'un instant, heure immatérielle,
Ou l'air est un parfum et le vent un soupir !

Au crépuscule ému la laideur même est belle,
Car le mystère est l'art: l'éclat ni l'éteincelle
Ne valent un rayon tout prêt à s'assoupir.

然り、この幽暗、朦朧たる黄昏、平安限りなき微光の中に、万象は模糊として却て其の輪郭を鮮明にする黄昏、天地は漠然として唯だ、色と影と音ばかりなる此の黄昏は、如何なる醜きものも……醜きもの直に美しきものと見ゆる、夢幻、神秘、不可思議の瞬間である。

【出典】

Jules Breton [ジュール・ブルトン (1827-1906)] の *Les Champs et la mer* (Paris: Alphonse Lemerre, 1875) [野と海] に収める «L'Artois» [アルトワ] の第3節 (最終節) のはじめの3連 (全四連)。ヴァルク詞華集に収める (第1巻 pp. 558-560)。ヴァルク詞華集はこの1編のみをJ・ブルトンから採る。

ちなみに、Artois は北部フランスに位置し Flandre [フランドル] に接する地域。ヴァルク詞華集の解説は *Les Champs et la mer* [野と海] が刊行された1875年に、画家としてのJ・ブルトンの代表作 «Les Feux de la Saint-Jean» [サン＝ジャンの火] が発表されたことを記す。

【原文】

以下にヴァルク詞華集に収めるテキストを示す。

Voici l'ombre qui tombe, et l'ardente fournaise
S'éteint tout doucement dans les flots de la nuit,
Au rideau sourd du bois attachant une braise
Comme un suprême adieu. Tout se voile et s'apaise,
Tout devient idéal, forme, couleur et bruit.

Et la lumière avare aux détails se refuse;
Le dessin s'ennoblit, et, dans le brun puissant,
Majestueusement le grand accent s'accuse;
La teinte est plus suave en sa gamme diffuse,
Et la sourdine rend le son plus ravissant.

Miracle d'un instant, heure immatérielle,
Où l'air est un parfum et le vent un soupir !
Au crépuscule ému la laideur même est belle,
Car le mystère est l'art: l'éclat ni l'étincelle
Ne valent un rayon tout prêt à s'assoupir.

(大意)

いま夕闇が下りるころ、燃えさかる炎が／夜の波のなかでゆっくりと消えようとする、／森の密やかなカーテンに燻火を残し／最後の別れを告げるように。すべてが朦朧として穏やかとなり／すべてが完璧となる。かたちも色も音も。

そして、ともしげな光が細部に入り込むのをためらう。／輪郭が気品を帯び、さらに、压倒する褐色のなか、／厳かに見事なアクセントが際立つ。／色は広がりゆく階調の中でさらに心地よい、／そしてくぐもる音がさらに甘美に聞こえる。

一瞬の奇跡、形を持たない時間／その時、空気は香水、風は吐息だ！／心動かされた薄暮の時間には醜さそのものが美しい、／なぜなら神秘は藝術だから。輝きもきらめきも／いま静まろうとする光線に及ぶことはない。

【異 同】

ヴァルク詞華集に収めるテキストとの異同は以下の通り。

(1) 第1連と第2連の間の行アキなし。

このためか「bruit」のあとの「,» (point) を «,» (virgule) に作る。

(2) 第2連第2行の「et」のあとの «,» なし。

(3) 第3連第2行の «Où» を «Ou» に作る (誤記・誤植)。

*旧版荷風全集もこの誤記・誤植を引き継ぐ。

(4) 第3連第4行の «l'étincelle» を «l'éteincelle» に作る (誤記・誤植)。

*旧版荷風全集もこの誤記・誤植を引き継ぐ。

*なお、旧版荷風全集のテキストでは、引用の詩は連を分けず、一切アキがない。

11. 「秋のちまた」① [第5巻 pp. 25-26]

【本文】

月は赤く、星は蒼い夏の夜を浮れ歩き、露清く、草匂う(ママ)夏の朝を喜んで居る中に、何時となく朝夕の風が、身にしみて来る。身体の中までも射通すかと思ふやうな、明い、乾いた午後の日光は、気付かぬ中に、自然と薄れ行き、時にはまるで燈の光のやうに、黄く見える事さへある。ラマルチンが、

Oui, dans ces jours d'automne où la nature expire,
A ses regards voilés je trouve plus d'attraits;
C'est l'adieu d'un ami, c'est le dernier sourire
Des lèvres que la mort va fermer pour jamais.

『万象消え行く秋の日の、朧ろの光ぞいや美しき。そは友のわかれを告るに似たらずや、そは死せんとする人の唇の、臨終の微笑に似たらずや。』の一句も今更のやうに思ひ出される。

【出典】

Alphonse de Lamartine [アルフォンス・ド・ラマルチーヌ (1790–1869)] の *Méditations poétiques* (Paris: La librairie Grecque-Latine-Allemande, 1820) [詩的瞑想] に収める «L'Automne» [秋] 全八連のうちの第3連。ヴァルク詞華集にはなし。「L'Automne» は *Méditations poétiques* の XXIX。

【異同】

プレイヤーード版 (Lamartine, *Œuvres poétiques*, Edition présentée, établie et annotée par Marius-François Guyard, Paris: Gallimard, 1963, p. 75) のテキストとの異同は以下の通り。

- (1) 第2行 «A ses regards voilés» の後に «,» (virgule) を付す。
- (2) 第2行末の «;» (point-virgule) は «,» (virgule) となっている。
- (3) 第4行末 «.» (point) は «!» (point d'exclamation) となっている。

引用部分の大意は以下の通り。

しかり、自然が消えゆく秋の日々のなかで、／おほろなその眼差しに私はより魅力を覚える。／それは友の別れのことは、それは最後の微笑み／死が永遠に閉じようとする唇に浮かぶ (最後の微笑み)。

12. 「秋のちまた」② [第5巻 pp. 30-31]

【本文】

こう云ふ晩である——バルコンに滴る雨の音が、わけもなく人を泣かせるのは！ ヴェルレーンの詩に

Il pleure dans mon cœur
Comme il pleut sur la ville;
Quelle est cette langueur
Qui pénètre mon cœur ?

O doux bruit de la pluie,
Par terre et sur les toits !
Pour un cœur qui s'ennuie,
Oh! le chant de la pluie !

Il pleure sans raison
Dans ce cœur qui s'éccœure !
Quoi ! Nulle raison ?
Ce deuil est sans raison.

C'est bien la pire peine
De ne savoir pourquoi,
Sans amour et sans haine,
Mon cœur a tant de peine.

『都に雨の濺ぐが如く、わが心には涙の雨が降る。如何なれば、かゝる悲しみの、わが心の中に進入りし。地に響き、屋根に響く、あゝ蕭条なる雨の音よ、雨の調べよ。然し、わが心は何が為めに憂うるとも知らず、単だ訳もなく潤ふ。訳もなく悲しむ悲しみこそ、悲しみの極みと云ふのであらう。憎むでもなく、愛するでもなくて、わが心には無量の悲しみが宿る……』と云ふ様な意味が歌つてある

【出典及び書誌】

Paul Verlaine [ポール・ヴェルレーヌ (1844–1896)] の *Romances sans paroles* (Paris: Lelapetier, 1874) [言葉なき恋歌] に収める «Ariettes oubliées» [忘れられたアリエット] 詩篇のⅢ全文。ヴァルク詞華集に収める (pp. 373-374)。

【原文】

以下にプレイヤー版 (Verlaine, *Œuvres poétiques complètes*, Texte établi et annoté par Y. -G. Le Dantec, Edition Révisée complétée et présentée par Jacques Borel. Paris: Gallimard, 1962, p. 192) のテキストを引く。

Il pleut doucement sur la ville.
(ARTHUR RIMBAUD)

Il pleure dans mon cœur
Comme il pleut sur la ville;
Quelle est cette langueur
Qui pénètre mon cœur ?

Ô bruit doux de la pluie
Par terre et sur les toits !
Pour un cœur qui s'ennuie
Ô le chant de la pluie !

Il pleure sans raison
Dans ce cœur qui s'écoëure.
Quoi ! nulle trahison ?...

Ce deuil est sans raison.

C'est bien la pire peine
De ne savoir pourquoi
Sans amour et sans haine,
Mon cœur a tant de peine !

【異 同】

プレイヤード版のテキストとの異同は以下の通り。

- (1) 第2連第1行の«Ô bruit doux de la pluie,»を«O doux bruit de la pluie,»に作る。
- (2) 第2連第4行の«Ô le chant de la pluie !»を«Oh! le chant de la pluie !»に作る。
- (3) 第3連第2行末尾の«.»(point)を«!»(point d'exclamation)に作る。
- (4) 第3連第3行の«Quoi ! nulle trahison ?...»を«Quoi ! Nulle raison ?»に作る(誤記・誤植)。
- (5) 第4連第4行末尾の«.»(point)を«!»(point d'exclamation)に作る。

ちなみに、ヴァルク詞華集のテキストは、このプレイヤード版のテキストとかなりの異同を示す。以下にヴァルク詞華集の異同を示す(丸数字は行を表す)。

- (1) 第2連第1行を«O doux bruit de la pluie,»に作る。
- (2) 第2連第4行を«Oh! le chant de la pluie !»に作る。
- (3) 第3連第2行末尾の«.»(point)を«!»(point d'exclamation)に作る。
- (4) 第3連第3行を«Quoi ! nulle trahison ?»に作る

【参 考】

エピグラフ épigraphe にランボオの句として«Il pleut doucement sur la ville.»が引かれるが、この句は公刊された詩篇には存在しないとされる。

第3連第3行の«trahison»[裏切り]が«raison»[理由・道理]となっているのは荷風自身の誤記(記憶違い)に由来するであろう。通行のテキストが第2連第1行を«O bruit doux de la pluie»とするのに対し、ヴァルク詞華集が«O doux bruit de la pluie»とし、荷風がこれに従っているところから、荷風はヴァルク詞華集のテキストを参照していた(あるいは記憶していた)と考えられる。

なお、旧版荷風全集のテキストでは、第1連のみが引用され、その後以下のようなテキストが続く[引用にあたり漢字を常用字体に改めた]。

「巷に雨の濺ぐが如く、わが心にも雨が降る。如何なれば。かゝる悲みのわが心の中には進入りし。地に響き屋根に音する蕭條なる雨の音よ、雨の調よ。わが心は何が故に憂ふとも知らず、唯だ訳もなく潤ふ。訳もなく悲しむ悲しみこそ、悲しみの極みと云ふのであらう。憎むでもなく、愛するでもなくて、わが心には無量の悲しみが宿る

……………」と云ふやうな意味が歌はれてある。(p. 380)

この詩には『月下の一群』(1925)に収める堀口大學(1892-1981)訳や鈴木信太郎(1895-1970)訳など、多くの優れた訳がある。大意は省く。

ちなみに第1行目の“*Il pleure…*”を、大學は「われの心に涙ふる」とし、鈴木信太郎も「わが心にも涙ふる」とするが、「*pleurer*」(不定法)という動詞は自動詞で「泣く、涙を流す」「嘆き悲しむ」、他動詞で「嘆く、悼む」「(涙を)流す」の意で、私が泣き嘆くのであれば本来は「*Je pleure…*」である。冒頭の「*il pleure…*」は「*Il pleut.*」(不定法は *pleuvoir*)「雨が降る」のような非人称構文を、通常非人称構文はとらない「*pleurer*」という動詞に転用して表現したものとされる。